笠木御所 古井戸たくさん 館あと

中世の伊勢では国司北畠氏が権勢を振るった。笠木の裏山に井戸跡や屋敷跡と思われる区画がいくつもあり、北畠氏縁の館跡と伝わる。

外城田地区笠木の裏山の台地は笠木御所（笠木館）跡と呼ばれています。御所といえば天皇など皇族や地位の高い人が住む所やその人をさす言葉です。この森がなぜ御所なのでしょう。

鎌倉時代後期の後醍醐天皇は幕府を倒そうとして二度も失敗しました。二度目は隠岐の島に流されますが、その二年後、幕府は滅亡してしまい、後醍醐天皇は京に戻ることができました。そこで、天皇中心の政治を取り戻そうとします。

この親政に不満を持つ武士達は足利尊氏を担ぎ朝廷に反旗を翻して室町幕府ができました。

後醍醐天皇は奈良県の吉野に逃れ、京都にも天皇がたちそれぞれ南朝、北朝に分かれ戦う時代（南北朝時代　一三三六～一三九二）が始まります。

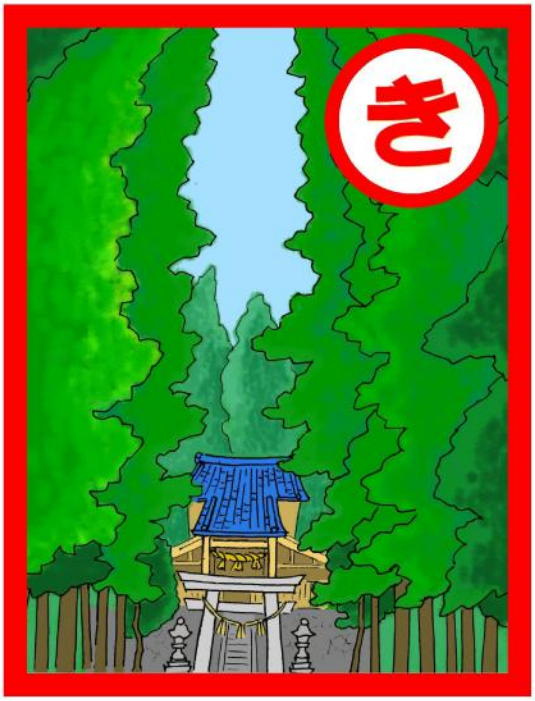
先立って伊勢に下った北畠親房は田丸城（現玉城町）を根城に吉野の朝廷を支え、現津市美杉町にも館（多気御所）を構え三男顕能が伊勢国司に任じられます。

北畠家は南北朝合一後も織田信長に滅ぼされるまで二四〇年もの間、伊勢を治めました。

笠木御所は実際、誰が築き、誰が住んでいたかはわかっていません。住居跡とされる土地は37の区画に分かれ24個もの井戸跡が残っています。

この笠木御所の南端からは田丸城が遠くに見渡せ狼煙場と伝わる場所もあるので田丸城の北畠家と密接な関係があったことは間違いありません。

ほかにも、矢田城や西山城、五桂城、近津長谷城など北畠氏家臣の砦や城とされる場所が多気町には数多く残されています。



木のトンネル抜けると覆殿千尋江神社

明治末の合併で茅広江村ができた時、下出江村の村社が新しい村社になり、千尋江神社と名が変わった。覆殿のおかげで江戸時代の社殿が良く保存されている。

茅広江村は明治22年茅原村と広瀬村、上出江村、下出江村が合併してできた村でした。丹生村、五ケ谷村ができた同じ時です。

千尋江神社は千二百年代後半、野呂氏隆が群馬県から移住したときに一緒に移されたと伝えられます。

その後、三瀬左京が丹生などを攻めた時、ここの社殿もすべて焼けてしまい、江戸時代初期に再建されたものです。

現在の社殿は江戸時代の中頃（享保年間）修理されたものですが、覆殿が作られたため、内側の本殿はあまり傷むこともなく、江戸時代の形が残されました。だし今ある覆殿は最近、鉄骨造りで再建したものです。

明治40年、政府はたくさんの社や祠、神社などをまとめ数を少なくしようとしました。合祀と言います。下出江の村の社は近隣の神社を合わせて出江神社と名づけられ、翌年茅広江村内の他の神社も合わせて千尋江神社とされたのです。

戦後の町村の大合併の時、茅広江村は松阪市に併合されましたが、上下出江は分かれて勢和村に加わりました。

字は異なりますが茅広江の名は神社にのみ残りました。

覆殿に守られた神社本殿は町文化財に指定されています。

櫛田川
清き流れに
鮎 おどる

櫛田川の鮎は昔から有名で、相可の鹿水亭は特にアユ料理で知られていた。屋形船や川床もあり多くの文人や観光客を引きつけた。

その一部が松阪市と多気町の北側の境界になっている櫛田川は三重県と奈良県の境にある高見山付近から東へ87キロメートル流れ、伊勢湾に注ぐ川です。

昔、倭姫命が旅の途中、川のほとりで櫛を落としたという伝説からつけられたといわれる川の名です。

江戸時代には水運が盛んで、伊勢本街道や和歌山街道が岸を通る重要な交通路で、文化の通り道でもありました。

流域の豊かな林業地帯から伐採された木は筏に組まずに川に流して途中で集める狩川という方法で運ばれました。

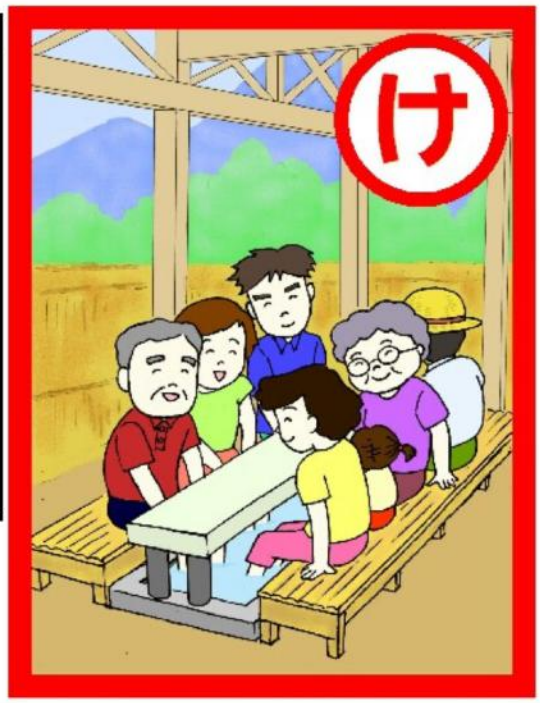
自然豊かな櫛田川の清流に住む鮎は昔から名高く、最近廃業した相可の鹿水亭は鮎料理で知られ、屋形船や川床もあって、文人が逗留し、歌会を催すなど文化的なサロンだったこともありました。

鮎の甘露煮等を扱う老舗が今も多気町内に数軒あります。

「鹿水」という言葉は相可近辺の櫛田川をさします。相可の可の字を鹿に変えたもので、下流の櫛田橋辺りでは掃水と呼んだりします。

鮎は資源を守るため禁漁期間を設け、櫛田川河川協同組合が管理しており、六月の第三日曜日から八月末まで解禁されます。

鮎は縄張り意識が強いため、友鮎という漁法で釣ることが多く、そのための鮎を売っている店もあります。



元丈の足湯談義に花が咲き

幕府の御目見医師、野呂元丈の生地波多瀬の「元丈の里」には「元丈の館」や本草学者でもあった彼に因み薬草薬樹園、薬草の足湯などが造られている。　幕末相可の豪商大和屋の当主西村広休も本草学者として知られ、県天然記念物に指定されたラウ樹は彼の植物園に植えられていたもの。

波多瀬に生まれた野呂元丈は幕府の採薬師として召し抱えられ、御目見医師に取り立てられました。また蘭学の祖と言われています。

その偉業を偲び波多瀬に作られた元丈の里には元丈の館や薬草薬樹公園、薬草の足湯などができ、観光や人々の交流の場となっています。

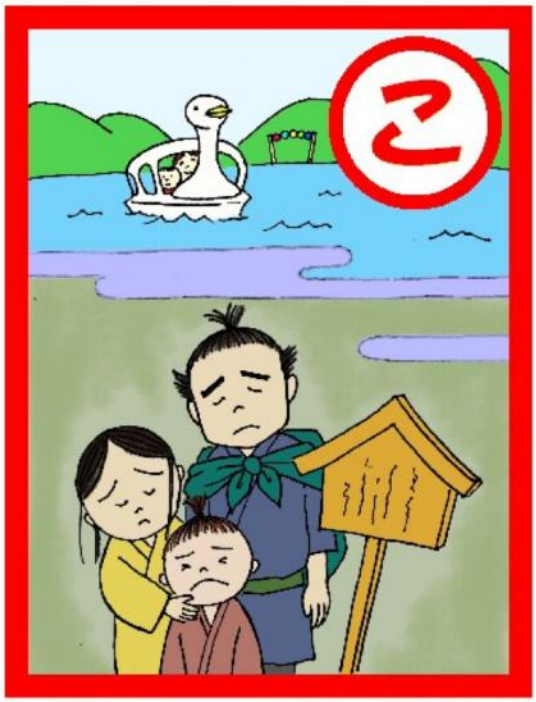
江戸中期、紀州藩主から将軍になった徳川吉宗は和歌山、伊勢の人材を多数登用しました。

そのころ、高価な薬草の朝鮮人参を中国から輸入していることなどから吉宗は日本の薬草を研究させようとします。まず採薬師に取りたてられたのは松坂の植村政勝と丹羽正伯で、正伯は京都でともに学んだ元丈を誘い植物採集のため全国各地を廻りました。

その間、元丈は御目見医師から寄合医師に取りたてられました。（元丈については ら のページも見て下さいね。）

元丈の影響か、この頃から南勢地域では本草学者が輩出します。

幕末相可の人、西村広休も本草を研究しています。江戸に店を出す豪商大和屋の当主で、やはり京都に出て本草学を学びました。大名貸しの貸し倒れなど明治維新の荒波に耐え切れず倒産。膨大な研究資料や書物なども散逸。各地の博物館などにたまたま収蔵され遺された物もあります。



五桂の池には悲しい物語

五桂池は江戸時代、米作りの水を溜めるため、藩により造られた。立ち退かされた人々は志摩地方の相差や夏草、現町内の朝長等に移住した。今はふるさと村として動物園・ロッジ・おばあちゃんの店等を地域の人々が運営している。

江戸時代も農業の中心は米作りでした。水田が増え水を確保することがとても大切でした。ただ雨が降るのを待つだけでなく、水不足に備えて水を溜めておく池を作ったり、田んぼへ水を引く水路を作ったり、いろいろの試みがされました。

江戸時代、多気町の土地の多くは紀州藩の領地でした。殿さまは遠い和歌山のお城か江戸に居ました。

五桂池を造るよう藩に願い出たのは佐奈川下流の弟国や河田の人達でした。すぐ横を櫛田川も流れています。水を引くための堰はいくつもありましたが川の水が少ない時は引き入れることもできなかったのです。上流と下流の村で水争いが起こることもありました。

そこで五桂の谷あいに堰を造って溜め池をつくることを考えました。藩の許しは出ましたが、住んでいた人々は立ち退かねばなりません。志摩地方の相差や夏草、今は町内の朝長などに移住させられました。

夏草には先祖の苦労をしのび明治になって建てられた「祖徳碑」があります。

今、池の畔では動物園・ロッジ・おばあちゃんの店などがあるふるさと村を五桂の人達が運営しています。